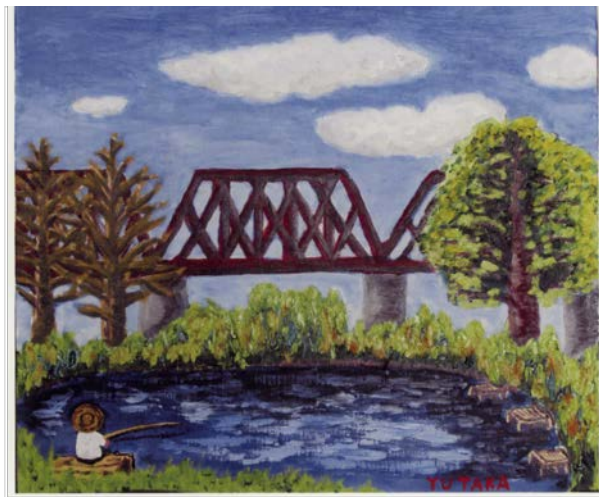


少年 幻想 小曲集

蘭夕鷹作品集

蘭
夕
鷹



曳野豊
作品









曳野依子
作品



曳野豊・依子夫妻

少年幻想小曲集・もくじ

少年幻想小曲集

汽笛……………14

飛行機……………16

少女……………20

昆虫館……………22

小さな舟……………26

アンダンテ・カンタービレ

1……………33

2……………38

3……………41

4……………47

5……………52

予備校生のバラード

プロローグ……………58

1……………65

2……………75

3……………88

4……………104

5……………117

6……………125

エピローグ……………130

暗澹たる森を抜けて……………132

「少年幻想小曲集」後記……………142

「アンダンテ・カンタービレ」後記……………143

「暗澹たる森を抜けて」後記……………
144

哀悼・蘭夕鷹……………
145

あとがき……………
147

少年幻想小曲集

汽笛

耳元で囁くようにポーと汽笛の音がやって来る。家族が寝静まった深夜、たった一人布団のなかで耳を澄ませる。カタンコトン、カタンコトンと、今、貨物列車は長い鉄橋を渡っている。黒い車体を微かに軋ませながら、闇の中の小さな希望のように、いつのまにか失われた憧れのように、カタンコトン、カタンコトンと列車は走って行く。ポーともう一度汽笛が鳴る。列車は鉄橋を渡り終え、見知らぬ世界に向かって走っていく。列車の響きは闇に吸い込まれるように消えてゆき、物音一つしない静けさだけを残して行った。

僕は寝返りを打つ。真っ暗い天井が僕を覆う。言いようのない不安が僕を包む。父と母が天井の闇の向こうへあの列車と共に行ってしまったら、どうなるのだろう。父と母のいない家。どこの部屋に行っても、誰もいず、台所に行っても、誰もいない。

閑散とした家の中で、僕はただひとり、家の真ん中に立ち尽くしている。悲しいとか、寂しいとか、そんな感情は起こってこない。僕しかない空間そのものが想像できない。庭を見ると物干し場で洗濯物を干す母の後ろ姿が霞のようになりと消える。居間で何か書き物をしていた父の体がどんどん透明になつて行き、ついには、先ほど手に握っていた万年筆が、ことりと倒れる。それを見ている僕自身も、重さを失っていき、ふんわりと床から浮かび、なんとも心細い不安定な気持ちになる。

僕はこれから深い孤独を抱えて生きてゆかねばならないのか。思わず、声を出して叫びたくなる。「僕を一人にしないで」。大人になった僕の痩せ細った後姿が見える。何と疲れているのだろうか。僕は重い荷物を背負って立ち上がり、この家を出て行くかとしていたのか。僕は僕の背中を追いかけた。外は真っ暗である。僕は僕を追って、その暗闇の中に彷徨いこみ、底知れない落とし穴に落ち込み、真っ直ぐに落ちて行つた。

飛行機

父と僕は一隻の渡し舟に乗っていた。渡し舟は重い流れに対抗するように対岸に向かっていた。もう着くかもう着くかと思わせるのだが、向こう岸は大きくも小さくもならない。流れの途中で停止しているような錯覚を覚える。ギーギーという音ばかりが体に伝わってくる。川面はすぐ目の前にある。淀んでいするためか、見た目は流れているという感じがしない。深いのか浅いのかまったく見当がつかない。そっと手を伸ばして指先を水に浸してみる。指に纏わりつくような生温かさを感じた。

急にどどどという圧力を感じたかと思うと、いつの間にか目の前に陸地が広がっている。自転車を引いている人、大きな荷物を背負っている人、我先にとみんな陸へと上がっていく。陸と言ってもそこは何もなく、ただ土手が広がっているばかりだ。土手には雑草が生い茂り、その向こうは白い空があるだけだ。僕は土手を上る階段を見つけ、走って上っていく。未だ見たことのない、

土手の向こうのその空の下に何があるのか、見てみたいという思いにかられながら。

どこまでも田圃が海原のように広がっていた。遠くに黒い牛が一頭だけ、草でも食んでいるのか、下を向いてじっとしている。絵に描かれたもののように、一つの姿勢に固まっている。

だれ一人歩いている人も、仕事をしている人もいない。何の音も聞こえてこない。先ほど舟に乗っていた人々はどこに行っただろう。辺りを見回しても姿は見えない。この静寂の中で、父と僕と二人だけしかない。しばらく僕は田圃の広がる風景に見入っていたが、ふと土手の下に一軒の家があるのに気が付いた。この広々とした田野のなかで、あまりにも存在感がなかった。画布の中の小さなシミのように黒く蹲っていた。ところが、いったんこの家に気づいてみると、どういうわけか目が離せなくなり、どうしても行ってみたいという気持ちが起こってきた。

引き付けられるように坂を走り下り、その家の前までやってきた。引き戸のガラス越しに中を覗いてみると、黄色い電球が一つ点いているだけで、薄暗か

った。僕は重い引き戸を押し開けて中に入った。何か分からなかったけれど、いろいろなものが目に入った。たぶん売り物なのだろう、所狭しと置かれている。僕は「ごめんなさい」と家の人を呼んだ。誰も出てこない。声が小さかったのだろうか。もう一度呼んだ。けれども、返事がない。しかたなしに僕は店内のものを一つ一つ見て回った。すると店の隅に小さなガラス張りの陳列ケースがあるのに気付いた。曇っていて決してきれいなガラスケースではないのだが、どういいうわけかそこだけ変にぼーと明るい。僕はケースに近付き、上から覗き込んだ。いくつかの品物のなかで、一つのもが僕の目を釘付けにした。それは掌に乗るぐらいの小さな飛行機だった、透明のプラスチック製で、淡いピンク色だった。周りの品物が薄闇に沈んでいるにもかかわらず、この飛行機だけはあたかも自ら光を発し、鮮やかにそこに存在していた。僕は欲しくてたまらなくなった。今にもふわっと浮かび上がり、ゆっくりと飛んでいきそうな気がした。再び店の人を呼んだ。店の奥の部屋はしーんと静まりかえっている。いつの間にか後ろに立っていた父に気づくと、父に買ってとせがんだ。父は「爪楊枝入れだよ」と一言ぼつりと言った。僕はその飛行機に爪楊枝が入っ

てる情景なんか想像できなかつた。「何でもいいよ、買って」。店の人は出てきたのだろうか。僕は一度も店の人の姿を見なかつたのに、店の外に出て立っていた僕に、父はピンクの飛行機を包装も箱もなにもなしで、そのまま僕の手に渡した。僕はすっかり夢中になって、左手の親指と人指し指の間に飛行機を挟み、ビューと言いながら、踊るように土手を駆け上った。

ピンクの飛行機は長い間水屋の棚に置かれていた。ただ一度も爪楊枝を入れたことがない。茶碗や皿の間に挟まれながらも、自らの存在を主張していた。僕は、その飛行機を見るたびに、かすかな疾しさを感じた。

少女

真つ直ぐな土手の上の道を自転車で走っていた。左側は緑の河原が広がり、遠くに大きな川が淀むようにゆったりと流れている。どこからか河原で遊ぶ子供の歓声が聞こえてくる。右側には住宅の黒い瓦の屋根がどこまでも続いている。春の陽光がふりそそぎ、白い雲が呑気に空に浮かんでいる。それぞれの家の窓ガラスは太陽の光を反射し、きらきらと輝いている。平和というものを絵に表せば、こんな風景になるのだろうか。

口笛でも吹きたくなるような爽やかな気分で自転車を走らせていると、前方の一軒の家にふと目が留まった。一人の少女がいきなりその家から飛び出してきた。長い黒髪で、白のブラウス、紺のスカートというどこかの学校の制服姿である。僕はなぜかその少女が気になり、いきなり自転車を止めた。土手の上から見ているので少女の顔立ちまでは分からない。けれども、その少女を見つめていると、心の奥に恥ずかしさと苦しさとが混ざり合ったような気持ちがあ

いてきた。

緩やかな風が吹いていた。少女は家の前の道の真ん中でしばらく俯いて立っていた。何を思いついたのか、黒髪を揺らせて再び家の中に入ってしまった。だれもいなくなった道、急に色あせてしまった平凡な道が取り残された。しばらく僕はそのまま自転車を止めて少女を待っていたが、二度と出てこようとはしなかった。太陽はいつしか傾き、僕の影が長く伸びている。空気も冷たくなってきた。僕は自分の影を引きずるようにして、再び自転車の重いペダルを踏みだした。